

【特別寄稿】

ステファヌ・マラルメの手紙一通

放送大学名誉教授 柏倉康夫

今般、パリ 6 区サン＝シュルピス通りにある馴染みの古書店「ジャン＝クロード・ヴラン」から、ステファヌ・マラルメの手紙一通を譲ってもらった。手紙はマラルメの娘ジュヌヴィエーヴが代筆したもので、「Stéphane Mallarmé」の署名と、「パリ ローマ通り 89 番地 / 1889 年 12 月 8 日」と自宅の住所と日付があり、ヴィリエ・ド・リラダンの未亡人に宛てたものである。17.7×11.2cm の薄茶色の紙を半分に折って 4 頁にしたものにかかれている。

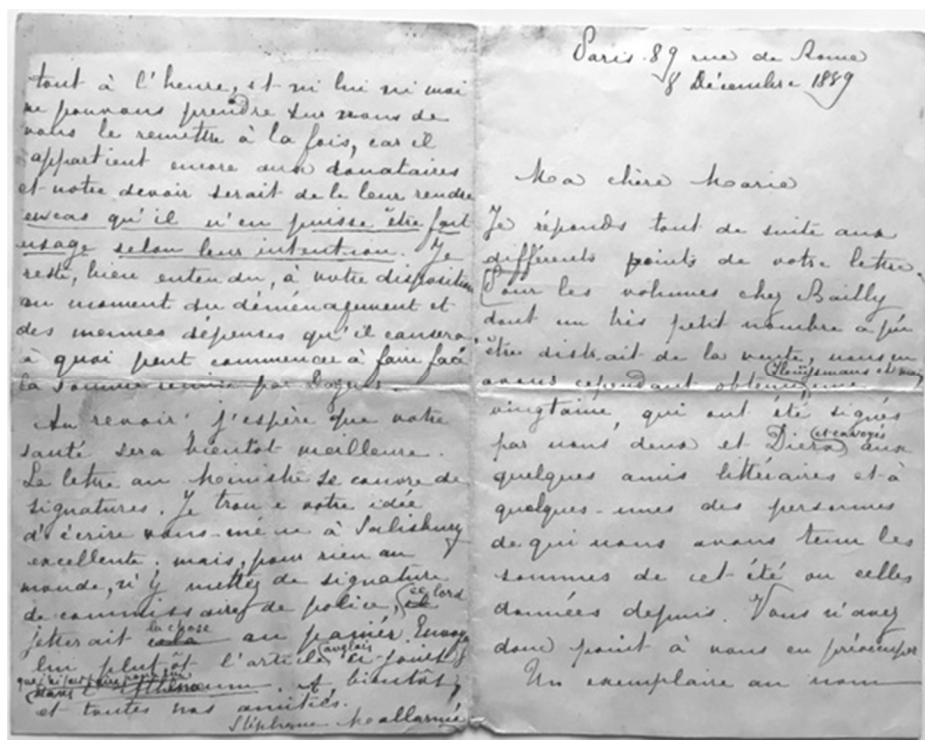
内容はヴィリエ・ド・リラダンの死後に出版された『過ぎ行く人たちのなかで (Chez les passants)』の販売と贈呈、それに 1889 年 4 月から 12 月にかけて、雑誌「民衆生活 (La Vie Populaire)」に連載された『未来のイヴ (l'Ève future)』からの収入に関するもので、マラルメが敬愛してやまなかったヴィリエ・ド・リラダンへの友情と、遺族への献身を伝える貴重な資料である。

ただ、なぜこれがマラルメ本人の手ではなく、娘のジュヌヴィエーヴが代筆したのか。ヴランによると、手紙はジュヌヴィエーヴがのちに結婚したボニオ博士の後継者の許に所蔵されていたといい、投函されて未亡人に渡ったのではなく、草稿だった可能性もある。ジュヌヴィエーヴの筆跡は父とよく似ていて、一見すると見間違ふほどだが、15 カ所ほどの削除、修正はマラルメ自身の筆と見られる。

マラルメの書簡集、Stéphane Mallarmé : Correspondance III の注記では、1889 年 12 月 19 日の日付で、ヴィリエ・ド・リラダン未亡人宛ての手紙が書かれたはずだが、未発見としている。書簡集の编者によると、これは 12 月 20 日付けでマラルメ宛てに出されたユイスマンスの手紙からの類推とのことだが、ユイスマンスの手紙の一節、「貴兄の手紙は上出来——とても明快だ——だからこの伯爵夫人然とした置き物には効くだろう！」¹⁾からみて、この手紙を一度ユイスマンスに読ませた上で、ヴィリエの未亡人に送ったことも考えられる。

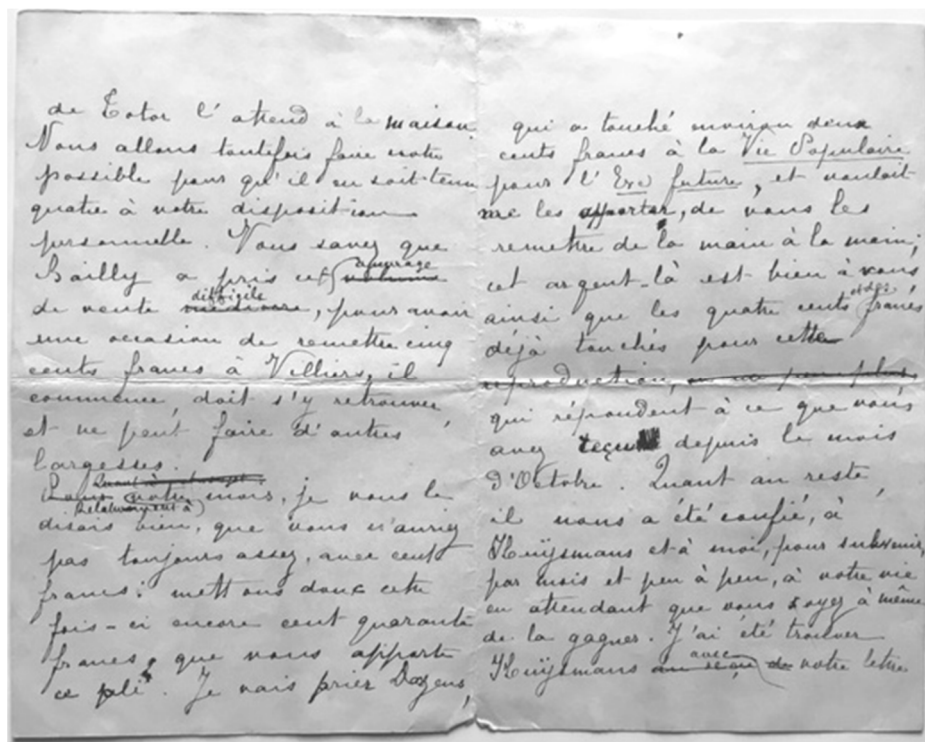
次頁以降に、手紙の写真とともに、原文のフランス語とその訳を掲げる。

手紙の写真



4 頁

1 頁



2 頁

3 頁

Paris 89 rue de Rome
8 Décembre 1889

Ma chère Marie

Je réponds tout de suite aux différents points de votre lettre. Pour les volumes chez Bailly dont un très petit nombre a pu être distrait de la vente, nous en avons cependant obtenu, Huysmans et moi, une vingtaine qui ont été signés par nous deux et Dierx et envoyés aux quelques amis littéraires et à quelques-unes des personnes de qui nous avons tenu les sommes de cet été ou celles données depuis. Vous n'avez donc point à vous en préoccuper.

Un exemplaire au nom de Totor l'attend à la maison. Nous allons toutefois faire notre possible pour qu'il en soit tenu quatre à notre disposition personnelle. Vous savez que Bailly a pris cet ouvrage de vente difficile, pour avoir une occasion de remettre cinq cents francs à Villiers, il commence, doit s'y retrouver, et ne peut faire d'autres largesses.

Relativement à notre mois, je vous le disais bien, que vous n'auriez pas toujours assez, avec cent francs : mettons donc cette fois-ci encore cent quarante francs que nous apporte ce pli. Je vais prier Darzens qui a touché environ deux cents francs à la Vie Populaire pour l'Eve future, et voulait me les apporter, de vous les remettre de la main à la main ; cet argent-là est bien à vous ainsi que les quatre cents et des francs déjà touchés pour cette reproduction, qui répondent à ce que vous avez reçu depuis le mois d'octobre. Quant au reste, il nous a été confié, à Huysmans et à moi, pour subvenir par mois et peu à peu, à votre vie en attendant que vous soyez à même de la gagner. J'ai été trouver Huysmans avec votre lettre tout à l'heure, et ni lui ni moi ne pouvons prendre sur nous de vous le remettre à la fois, car il appartient encore aux donataires et notre devoir serait de le leur rendre en cas qu'il n'en puisse être fait usage selon leur intention. Je reste, bien entendu, à votre disposition au moment du déménagement et des menues dépenses qu'il causera, à quoi peut commencer à faire face la somme remise par Darzens.

Au revoir, j'espère que votre santé sera bientôt meilleure. La lettre au Ministre se couvre de signatures. Je trouve votre idée d'écrire vous-même à Salisbury excellente ; mais, pour rien au monde, n'y mettez de signature de commissaire de police, ce lord jetterait la chose au panier. Envoyez lui plutôt l'article anglais ci-joint que j'ai fait faire pour lui dans l'Atheneum. A bientôt, et toutes mes amitiés....

Stéphane Mallarmé

パリ ローマ通り 89 番地

1889 年 12 月 8 日

親愛なるマリー、

あなたのお手紙の諸々の点について直ちにお答えします。バイイ²⁾のところの本については、販売用から取り除けられたのはごくわずかな冊数でしたが、ユイスマンス³⁾と私はそれを手に入れて、私たち 2 人とディエルクス⁴⁾が署名した 20 冊ほどを、文学上の友や、この夏に代金を受け取ったり、それ以後支払をした若干の人たちに送りました。ですからあなたが心配なさることは何もありません。

トートル〔ヴィクトール、ヴィリエの息子〕の名前で取り置かれている 1 冊は、家で彼を待っています。私たちはそれでも個人的に自由にできる本が 4 冊になるように出来るだけのことをいたしましょう。あなたもご存知のように、バイイはヴィリエに 500 フランを渡す機会を得るために、売るのが難しいこの作品を引き受けました。彼は仕事を開始し、元を回収する必要がある、そのほかの収益を生むことは出来ていません。

私たちの日々に関しては、申し上げたように至って良好ですが、あなたの方は 100 フランではいつも充分ではありませんまい。そこで今回もこの本がもたらす 140 フランをさらにお渡しいたします。『未来のイヴ』で「民衆生活」から凡そ 200 フランを受け取り、それを私に持ってこようとしたダルゼン⁵⁾に、あなたに直接手渡すように頼んでみます。この金は、この再版により既に 10 月以降に手にされた 400 フランと同様、正しくあなたのものです。残りについては、あなたが自分で生活費を稼げるようになるまで、必要な援助を毎月少しずつ渡すように、ユイスマンスと私に預けられています。先ほど、あなたの手紙をもってユイスマンスに会ってきましたが、彼も私も、いまそれをお渡しする責任を負いかねます。なぜならそれはまだ贈り主のものであり、彼らの意図通りに使うことが出来ない場合は、私たちの義務として、それを彼らに返さなくてはならないからです。私は、もちろん、引越しのときも、そのための細々した費えについてもお役に立つつもりです。ダルザンから渡された金額がその手始めになり得るでしょう。

ご機嫌よう、あなたの健康がよくなることを望んでいます。大臣宛ての手紙には多くの署名がなされています。あなたご自身がソールズベリー卿に手紙を書くという考えは素晴らしいと思います。でも、いかなる場合も、警察署長のサインはさせないように、卿は屑籠に投げ込んでしまうでしょうから。むしろ、私が彼のために「アシニアム」に掲載させた、同封の英文の記事を卿に送ってください。またお目にかかります。友情をこめて。

ステファヌ・マラルメ

終生の友情

マラルメが篤い友情を持ち続けた作家ヴィリエ・ド・リラダンが癌のために亡くなったのは、この年 1889 年 8 月 19 日である。ヴィリエが貧窮のうちに病をえた最晩年、マラルメが親身の援助を惜しまなかったことはよく知られている。

ヴィリエは 1886 年 9 月 9 日のマラルメ宛ての手紙で、「親愛なるマラルメ、ひどく咳き込み、今度は深刻で、気管支拡張に苦しんでいる」⁶⁾と伝え、かかりつけの医師の処方を持続したが効果がなく、マラルメの知人のアルベール・ロバン博士の住所を知らせてくれるように頼んだ。

ヴィリエの死因は消化器系の癌で、このときの気管支の不調は直接の原因ではなかったと思われるが、彼の健康状態が悪化した最初の兆候であった。

その後ヴィリエの病状は次第に進み、1888 年 12 月になると深刻な状態があらわれるようになった。彼はこの年の夏から秋にかけて『続残酷物語 (Nouveau contes cruels)』の校正を行い、11 月 13 日には出版にこぎつけたが、仕事をするのも苦痛だった。

年が明けた 1889 年 1 月 11 日、詩人で医師の知人アンリ・カザリスへの手紙では、「この 2 年前からの胃の空洞は、堪えがなくなっている」⁷⁾と書いている。幸いヴィリエは自分が癌を患っていることを知らなかったが、4 日前の 1 月 7 日のマラルメ宛ての手紙で、「肺炎の痛みで、床についている」といい、会いに来てほしいと訴えている。ヴィリエはこの頃には、苦痛のために筆を執ることができなくなり、収入の道が途絶えた。1 月から 2 月にかけて、マラルメにわずかの金を貸してほしいと頼む手紙が残っている。

マラルメは友人の窮状を救うために行動に出た。病気の治療に関しては、女友だちのメリー・ローランの助力を得て医師を紹介した。彼女の庇護者のエヴァンス博士はアメリカ人の歯科医師で、知人にも医療関係者が多かった。さらにユイスマンスとレオン・ディエルクスの協力を得て、ヴィリエ救済のために「友情の醸金」を組織して、友人知人に呼びかけた。

美術評論家のジャック＝エミール・ブランシュ宛ての 3 月 12 日付の手紙――

「親愛なるブランシュ様、

われわれの可哀想な友ヴィリエ・ド・リラダンは、病気に心配事と、いつまで続くか分からない危機をくぐっています。われわれ何人かは、これを和らげてやりたいと望んでおりますが、これをお知らせしないでいると、あなたも残念がられると思いました。

毎月、定額の 5 フランを負担することで、月毎か前払いで郵便為替で私の手元にお届けくださるのが一番手っ取り早い方法かと存じます。

早速この 3 月からとりかかります。

敬具、

ステファヌ・マラルメ」⁸⁾

同じような回状はフランソワ・コペ宛てなど数通が見つかっていて、内容はみな同じである。この回状に賛成して金を送って来た 40 人ほどの有志の名前が判明しているが、毎月 250 フランが集まったことから、この他にも賛同者があったと推測される。マラルメが作成した計算書によると、援助金の総額は 5,330 フラン、そのうち 2,390 フランが友人その他の個人からのもの、2,940 フランが省庁、劇作家協会、新聞「ル・フィガロ」など新聞社からの寄付であった。

ヴィリエは治療に専念するために、4 月中旬から、パリ東南にあるノジャン＝シュール＝マルヌに家を借りて移り住んだ。マラルメはロバン博士を伴って見舞うなどしたが、ヴィリエの病状は進行し、7 月 12 日にはユイスマンスの発意で、パリのサン＝ジャン＝ド＝ディユ修道会の施療院に移ることになった。マラルメは同日、アンリ・ド・レニエに宛てて、「ヴィリエのことだが、8 月か 9 月でしょう」⁹⁾と告げた。

出会い

マラルメがヴィリエ・ド・リラダンと最初に出会ったのは、1864 年 9 月のことである。南仏トゥルノンの高等中学校の英語教師になったばかりのマラルメは、最初の夏休みを利用して、3 歳年上でパリの文壇に多くの知己をもつエマニュエル・デ・サールの紹介で、これまでに創作した詩を浄書した革表紙の手帳を携えてパリに行った。

最初に訪問したのは詩人のカチュール・マンデスであった。マンデスはパリ近郊のショワジール＝ロワの父の家に住んでいて、そこにはヴィリエが寄宿して戯曲『エレン(Elén)』を執筆中だった。のちに「1864 年の手帳」と呼ばれる手帳には 12 篇の詩が収められていて、マラルメはそれをマンデスに読んで聞かせた。

マンデスはマラルメより 1 歳年上にすぎなかったが、すでに文壇で認められ、1860 年には雑誌「ルヴュ・ファンテジスト」を創刊し、新たな文学の普及に精力的に取り組んでいた。マンデスはマラルメの詩の新鮮さに驚き、すぐにヴィリエにも読んで聞かせた。するとヴィリエは、「ただちに私の興奮を共有した」¹⁰⁾という。

マラルメの方も、4 歳年上のヴィリエの高貴な家名、その進るような才能、活気に満ちた会話の妙に圧倒され、たちまち魅了された。2 人はお互いのなかに文学上の同類を見出したのだった。

マラルメは 1865 年 12 月 31 日の大晦日に、40 通ほど手紙を書いたが、そのなかのヴィリエ宛ての手紙では、「私たち 2 人の間で手紙は、驚くほどよく理解し合っている 2 つの魂が、手紙の卑俗さに対して、自然で、神聖な低音部をつくっているにもかかわらず、どうしても偶然に棹さす通俗的な旋律になってしまいます。それに、私たちは〈詩〉を書くときしか、2 つの語を結びつけることが出来ないといった才能を持っているように思います。(中略)一言でいうと、私の作品の主題は〈美〉で、外見上の主題は、〈それ〉に赴くための口実にすぎません。これこそまさに、〈ポエジー〉という言葉だと思います」¹¹⁾と書いている。これはマラルメが長編詩「エロディアード(Hérodiade)」の創作に没頭していたときの信条であり、それを打ち明けた相手が信頼するヴィリエであった。

ヴィリエ・ド・リラダンはブルターニュ地方サン＝ブリューの名門貴族の家に生まれた。子どものときから詩作と音楽に才能を示し、1860年には叔母の遺産を相続し、その金でパリへ出て文学仲間と交わるようになった。そして1867年に、新しく創刊された「文芸・芸術評論」の編集を任せられると、マラルメがエドガー・アラン・ポーの詩の翻訳をこころみていたのを知っていたから、それを送るように頼んだ。

マラルメは承諾するとともに、「私は、偉大な感受性に助けられて、〈ポエジー〉と〈宇宙〉の間の内密な相関関係を理解しました。そして、〈詩〉が純粹であるためには、〈詩〉を〈夢〉と〈偶然〉とから脱せしめ、これを〈宇宙〉の概念と並置するという意図を抱きました。不幸にも、ただ詩的享樂のために組織させられた魂である私は、この着想の予備的な作業において、貴兄のように〈精神〉を自由に駆使することが出来ませんでした。——ですから、私が感覚のみで、〈宇宙〉の〈理念〉に到達した（そしてたとえば、純粹な〈虚無〉の消え難い観念を保ち続けるのに、私は自分の脳髓に、絶対空の感覚を強制しなければならなかった）ことを知ったら、貴兄も必ずや恐怖を覚えられるでしょう。」¹²⁾という難解な文章を含む手紙を送ったが、相手がヴィリエだからこそ理解してもらえると考えたのである。それほど二人の信頼は深いものであった。

1870年7月末、ヴィリエはマンデスやその女友だちのジュディット・ゴートイエ〔テオドル・ゴートイエの娘〕とともに、スイスのルツェルンに近いトリーブシェンにあるワーグナー邸を訪問した。彼ら3人は熱烈なワーグナー音楽の愛好家で、訪問に先立ってドイツとスイスの各地でワーグナーの上演を見てまわった。ただこの時期、フランスとプロシヤの間で緊張が高まっており、戦争がもはや不可避の状態だった。巨匠は彼らを迎えたが、この日はまさに普仏戦争が勃発した当日で、フランス嫌いのワーグナーの対応は冷ややかだった。

この訪問のあと、3人は国境を越えてリヨンからローヌ川を船で下り、アヴィニョンに移り住んでいたマラルメに会いに来た。8月6日のことである。

文学を語る友のいないマラルメは感激し、夕食のあとで遠来の客を書斎に招じ入れると、取りかかっていた未定稿の『イジチュール(Igitur)』の幾頁かを朗読した。人間精神の自律的働きを主題として、偶然、虚無、絶対、意志的な死などを問題とした「哲学的物語」に、ヴィリエは熱心に耳を傾けて、好意的な感想を述べた。だがマンデスの方は呆然となった。

「何だって！　これがそれ、その作品なのか。主題さえ分からず、言葉はその固有の意味を持ちあわせない。マラルメがあれほど長い思考の努力のあとに、自らの夢に閉じこもって、あれほど長い間堪えてきた奇態な苦悩の末に到達したのがこれなのか。」¹³⁾

マンデスは気の毒で本人に感想を言う気になれず、旅で疲れたと言って、その夜は部屋に引き下がり、翌朝、感想を聞かれる前にパリへ発った。一方のヴィリエは難解な『イジチュール』に感激した様子だった。

臨終時結婚

ヴィリエは1859年に刊行した『初期詩集(Premières poésies)』をはじめ多くの作品を著した。1880年の『新世界(Le Nouveau Monde)』、83年の短編集『残酷物語(Contes cruels)』、86年の『未来のイヴ(L'Ève future)』、87年『トリビュラ・ボノメ(Tribulat Bonhomet)』などは文学愛好家の関心をひいた。しかしそれらから得られる印税は決して多くはなく、生活費を稼ぐのにボクシングのコーチや葬儀場で働かなければならなかった。

ユイスマンスは1884年に発表した『さかしま(A Rebours)』で、マラルメとともにヴィリエ・ド・リラダンの作品を称揚して文名は高まったが、どの作品も売れたのはわずかな部数で、経済的困窮が解消されることはなかった。こうしたなかヴィリエは病に倒れたのである。

1889年の夏、死期が近づいていたヴィリエにとって、解決しなければならない問題があった。ヴィリエは1879年ごろ、パリのモビージュ通りの貧しいアパートマンに住んでいたが、同じ建物にいたマリー＝エリザベット＝ダンティースという家政婦と関係をもち、1881年1月10日に男の子が生まれた。子どもはヴィクトール＝フィリップ＝オーギュストという名門の子どもらしい名前をあたえられたが、ヴィリエの息子としては認知されず、戸籍上は私生児として届けられた。母ダンティースの姓は彼女の旧姓で、彼女はブレジュラというベルギー生まれの御者と結婚した前歴があり、寡婦となったあとも戸籍上はブレジュラを名乗って、前夫の息子も育てていた。

自らの出自に誇りを持つヴィリエはこの女性と結婚する気はなかったが、ただひとり息子には由緒ある貴族の家名を継がせたいと切望した。マラルメとユイスマンスは、この認知問題を解決するには、「臨終時結婚」という形を取って、2人を正式に結婚させる以外にないと考えてにいたった。

「臨終時結婚」には、法律上、宗教上、複雑な手続きを必要としたが、ヴィリエの死期が迫るなか、マラルメとユイスマンスは必要な書類をひそかに集め、役所の知人の援助を頼むなど奔走した。

「臨終時結婚」の要件の一つは、当事者に死期が迫っていることを認めさせることであった。しかしヴィリエは病状が差し迫っているとは考えておらず、マラルメの説得も失敗に終わった。だが結局は、ヴィリエの聴罪司祭であるフランシスコ会の神父の説得で、ヴィリエが受け入れて、死の4日前の8月14日、マラルメ、ユイスマンス、ディエルクス、『残酷物語』などの出版者ギュスターヴ・ド・マレルブの4人が立会人となって結婚式が行われた。字の書けないマリーは結婚証明書に×印を書き入れた。

ヴィリエが亡くなった翌日の20日、マラルメは妻と娘ジュヌヴィエーヴに宛ててこう知らせた。

「ヴィリエは苦しまなかった。自分が死んでいくのを静かに感じていた。

埋葬は明日水曜日、正午。とても慎ましい、しかし品位ある式になるでしょう。彼の紋章を描いた質素な黒い掛布。まさに彼にふさわしい。ともかくバンタンやバニユーといったおぞましい墓場は避けることができました。そしてほとんどただ同然で、バティニョル

の木蔭の多い小さな墓地を用意することができました。」¹⁴⁾

マラルメとユイスマンスの尽力はこれで終わらず、ヴィリエの死後も続いた。二人はヴィリエの遺言執行人となり、遺族の世話に力を尽くした。ノジャンの家の家賃や食料品を購入した付けなど、ヴィリエの借金を清算するため、家具が差し押さえられそうになると、マラルメは未亡人のマリーに 2,500 フランの金を貸しているという偽の貸借契約書をつくり、それを防ぐことまでやった。

ユイスマンスは 8 月末に休暇をとるとノジャンへ赴き、そこで未刊の戯曲『アクセル (Axël)』や、『過ぎ行く人びとのなかで』に関係するおびただしい未定稿を見つけて、その整理をした。これらはやがて出版されることになる。

その上で、2 人はすでに出版され、あるいは雑誌に掲載されたヴィリエの作品の著作権料の交渉など、未亡人のマリーと遺児ヴィクトール〔トール〕の生活を守るための実務的な尽力を惜しまなかったのである。

今度見つかった手紙は、こうした事情を未亡人マリーに知らせるものだが、その内容を解く鍵となるマラルメの手紙が公表されている。それはノジャンで遺稿の整理にあたったユイスマンスに宛てた 1889 年 8 月 30 日付のもので、避暑先のヴァルヴァンから投函された。

「・・・私の手紙¹⁵⁾は、トールの教育費に当てられるわずかな年金について、遠戚に問い合わせるみてはどうかというものでしたが、返事がないので期待できそうです。私はポーの研究者であるイングラムの批評が、イギリスの有力な文芸週刊誌「アシニーム」に掲載されるのを待っています。というのもトールに関する要望と同様、それがソールズベリー卿の目に留まるのを期待するからです。最後に行政当局へ要望する年金については、まもなくスイスから戻るルージョンが話してくれるはずです。以上が私たちにできるすべてです。最悪の場合でも、ごくわずかな年金として、葬儀のときに述べられた善意の醵金を出してもらえるでしょう。・・・」¹⁶⁾

見つかったマリー宛ての手紙の最後の部分で、マラルメはヴィリエの 8 歳になる遺児ヴィクトールのために、文部大臣に宛てた陳情書に触れているが、これにはフランソワ・コペ、ゾラ、バンヴィル、デュマなど 12、3 人の作家や詩人たちの署名がなされていた。それを提出した上で、マラルメは作家で官僚でもあった知人のアンリ・ルージョンに根回しを依頼したのである。

マリーがイギリス首相のソールズベリー侯爵に手紙を書くという考えを持った点については、ヴィリエが 1888 年にノルマンディーのディエップで侯爵と出会い、あとで自作の『新世界』の主人公の名前「セシル卿」が、侯爵の名前と偶然一致していたことに気づいて、庇護を受けられるかもしれないと考えていたことが背景にある。

しかしそんな僥倖は期待すべくもなく、それよりもイギリス人の批評家イングラムのヴィリエを取り上げた記事が、著名な文芸誌「アシニーム」に掲載されて、それが侯爵の目に留まり、そこから物事が進展することをマラルメは期待していた。イングラムの記事は同誌の 9 月 7 日号に掲載されたが、残念ながらソールズベリー卿からは何の反応もなかった。

一方、文部大臣に宛てた陳情書の方は、ルージョンの働きかけの効果もあって、翌年からヴィクトールが成年に達するまでの間、国から毎年 600 フランの教育費があたえられることになった。

マラルメがヴィリエ・ド・リラダンのために行ったのは、こうした経済的支援ばかりではなかった。1890 年 2 月、マラルメはベルギーへ行き、「ヴィリエ・ド・リラダン」と題した講演を行った。講演はブリュッセル、アンヴェール、リエージュ、ふたたびブリュッセル、ブリュージュと 6 回行われ、パリに戻ってからは、2 月 27 日にヴィルジュスト通り 40 番地の、画家エドゥアール・マネの弟ウージェーヌ・マネとベルト・モリゾ夫妻のサロンで、ドガ、ルノワールなど親しい画家や、マラルメを囲む「火曜会」のメンバーの詩人など凡そ 40 人を前に同じ内容の講演を行った。

「夢を習いとする人間がもう 1 人のそういう人間のことをお話ししにここへ来ています、死んだ人間のことを」と語り出される講演は、ヴィリエの業績をたどりつつ、「書く」ことの本質を問うもので、マラルメの批評のなかでももっとも重要なものである。マラルメはこれをオマージュとしてヴィリエに捧げたのだった。

- 1) Stéphane Mallarmé : Correspondance, III, Gallimard, p.372. n 3. (ステファヌ・マラルメ『書簡集』第 3 巻、372 頁、注 3。以下 Corr.III と略記)
- 2) エドモン・バイイ (Edmond Bailly) は「出版カウンター (Comptoir d'Édition)」という名前の出版社を立ち上げ、ヴィリエの生前に『過ぎ行く人たちのなかで』を出版することを取り決めた。出版社はマラルメと関係の深い「独立芸術書房 (Librairie de l'Art Indépendant)」から分かれたもので、ヴィリエは「出版カウンター」という、皮肉をこめた名前が気に入っていた。
- 3) ジョリス＝カルル・ユイスマンス (Joris-Karl Huysmans)。自然主義の小説家。1884 年に刊行した小説『さかしま』は、同年出版されたヴェルレーヌの『呪われた詩人たち』とともに、マラルメやヴィリエ・ド・リラダンを世に知らしめるのに力があつた。
- 4) レオン・ディエルクス (Léon Dierx) は詩人で、マラルメの最良の友の一人。
- 5) ロドルフ・ダルザン (Rodolphe Darzens) は出版業者で詩人。ヴィリエの遺言執行人でもあつた。
- 6) Corr. II, p.57
- 7) Corr. III, p.283
- 8) Corr. III, pp.292-293
- 9) Corr. III, p.325
- 10) Catulle Mendès : Le Mouvement poétique français de 1867 à 1990. Fasquelle, 1903, p.139
- 11) Corr. I, pp.192-193
- 12) Corr. I, p.259
- 13) Catulle Mendès : ibid.
- 14) Corr. III, pp.347-348
- 15) ヴィリエ・ド・リラダンの最初の伝記、Villiers de l'Isle-Adam, L'écrivain-l'homme, Albert Savine, 1893 (『ヴィリエ・ド・リラダン、作家一人』) を書いた、ロベール・デュ・ポンタヴィス・ド・ウッセイ (Robert du Pontavice de Heussey) 宛ての手紙。
- 16) Revue d'Histoire littéraire de la France (RHLF) No.5, 1999, X III